BAD ENDから始まるストーリー

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＡＤ　ＥＮＤから始まるストーリー

【Ｎコード】
Ｎ９０３３Ｘ

【作者名】
あいあむウィーゼル

【あらすじ】
あの日、１人の少年は壊れる。そして運命が始まった。狂気を孕んだその瞳は、果たして何を映す？　これは風峰千春が織りなすある１つの物語……。

プロローグ：反転する世界（前書き）

と言うわけで、始まります。
ggdかもしれませんが、お楽しみください。

プロローグ：反転する世界

愛する事は罪ですか。

愛される事は罪ですか？

愛したいと請う事は罪ですか？

愛されたいと請う事は罪ですか？

僕はずっと、愛されたかった。

愛し、愛され、それが幸せに繋がる。

だから、僕が家族を愛すれば、家族もきっと僕を愛してくれる。

でも違った。愛なんて、最初から幻想に過ぎなかった。

……それを僕はあの日、身を以て思い知る事になる。

赤い世界に佇む、織斑千冬（せかいさいきょう）。そんな彼女の手には、赤いナニカで濡れた剣が握られている。

その足下には、力なく横たわる亡骸が。

「大丈夫か、千春」

そう言って、僕に近づいてくる。
大好きな姉。助けてと、何度も呼び続けた。
助けに来てくれた。でも、違う。

『大丈夫かい？』

屈託のない笑顔を浮かべていたその顔は、どこにも無い。
光に溢れていたその瞳に光が灯る事は、もう無い。
目の前の存在によって、失われた。

「千春？　どうしたんだ？」

1歩1歩近づいてくるそいつが、とてつもなく恐ろしいナニカに思えて、1歩後ずさる。
とても愛おしいはずの存在からは、おぞましいものしか感じない。
吐き気がする。キモチワルイ。
震えが止まらない。
そいつが手を伸ばす。

「ひっ………」

殺される。

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて

「アアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

その日、僕の世界は壊れた。

「……随分と、軽率な真似をしたものね」

病院へと現れた同僚の第一声はそれだった。

私の身が、いつもよりも数倍冷たい視線に晒される。

「あの子はまだ12歳。そんな子供の前で人を斬り殺すなんて……」

……確かに、軽率だった。

一夏の側に千春はいなかった。

他の誘拐犯から聞き出した情報によると、別の場所へ連れて行かれたという。

その場所へと向かい、千春に襲いかかろうとしていた男を目の当たりにし、つい……。

「無用な殺人まで犯してしまった、というわけね」

「……どういう意味だ」

「調査結果によると、あなたの斬り殺した男性は、誘拐とは何ら関わりの無い一般人だったらしいわ」

バカな……何故一般人があんな場所にいる！

「何故って、それは分からないわよ。……ただ、もしもだけど、たまたま誘拐の現場に遭遇した正義感の強い人が、そのまま放っておけずに突入した……というのも考えられるわよね？」

そう言われ、確かにそうだと納得する……して、しまう。

そうだ。千春は「やめて」と言っていた。あれは、そういう事だったのか？

だとしたら、私は何と言う事を……！

「どうするつもり？　多分、ドイツ軍は今回の事件をもみ消すわよ？」

後始末はドイツ軍が行っている。誘拐はもちろん、殺人も。

誘拐事件が奴らの自作自演である可能性も否定出来ないが、それでも今どうこう言う事は出来ない。

「……今、私がいなくなるわけには行かない」

そうなれば、一夏と千春だけになってしまう。

誘拐事件があった直後だ。２人だけにするのは危険だ。何が起こるか……分からない。

昨日の今日という言葉があるように、また何か起こる可能性も無いとは言えない。

さらに私の責任とはいえ、千春があんな状態では放っておくわけにはいかない。今、私がいなくなるわけには……。

「つまり、もみ消しを容認すると？」

「仕方ないだろうに……！」

そう答えた私に、彼女はあからさまにため息を吐く。

失望した、と言わんばかりに。

「……まぁ、あなたの選択だから。私が口出しする筋合いないし」

奴はそう肩を竦め、去って行く。

……相も変わらず、掴み切れん奴だ。

「1つだけ、忠告。きちんと向き合わないと、いずれ後悔する事になるかもよ？」

それだけ言い残し、奴は去って行った。

分かっている。私は罪を犯した。これは私が償わなければならない。

だが、この時の私は分かっていなかった。奴が「向き合う」べきだと言ったのはその事では無く、全く違ったものである事に。

そして私は、選択を誤った事を深く後悔し続ける事となる……。

プロローグ：反転する世界（後書き）

ほとんどプロットも無いまま、始まりました。
「ＢＡＤ　ＥＮＤから始まるストーリー」。その３つ目のルート「縁切りルート」。
ネタ倉庫に投稿したものと同じ流れになりますが、いくつか変更点があります。……まぁ、タグと本文を読んでもらえば、何となく分かるかもしれませんが。

千春が歪んでいくのは、何も事件の所為だけではありません。
何故、歪んでしまうのか。それをさらに強める方法を考えて、弄ってみました。
少しの間は誘拐事件以後の千春とそれを取り巻く環境について進めていくつもりです。

第1話：終わる始まり、始まる終わり

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｈａｒｕ〕

意識が覚醒すると、目の前に飛び込んで来たのは見知らぬ部屋だった。

……うん、こういう場合言うべき言葉はきっとアレだ。

「……知らない天井だ」

天井となっている台詞を呟き、身体を起こす。

身体に痛みは無い。特に怪我をしているわけではないので当たり前かもしれない。

周囲を見渡す。と、アルコール消毒液特有のツンとした臭いが鼻を刺す。……うーん、どうやらここは病院か、それに値する場所らしい。

はて、何でこんなところに……。

「……ぁ」

突然、頭の中にあの時の光景が蘇った。
赤い世界の中心に立つ、おぞましいモノ。
それが私へと近づき、そのまま手を伸ばして……。

「しっかりなさい」

「ッ！？」

肩を強く叩かれると共に呼びかけられ、ハッとなる。
今、何を……それに、今の光景はいったい……。

「気がついた？」

ホッとしたような表情を浮かべている女性。
青よりも薄い藍色に近い髪。腰まで長く垂らした髪は透明度が高く、
部屋の明かりでキラキラと輝いている。

「……理音、さん」

風峰理音さん。お姉ちゃんの同僚で、今回のモンド・グロッソには

日本代表のチームメイトとして参戦している。とは言っても、整備班の人間としてだけど。

あの、理音さん。僕、どうしてここに……それに、何が？

「あなたが一夏君共々誘拐されたのは覚えてる？」

「誘、拐」

そう言われ、ようやく思い出した。

あの日、決勝の応援に行こうとして、会場へと向かう途中でいきなり車に連れ込まれた。b僕も一夏も抵抗したけど、布を顔に当てられたら意識が遠くなって……。

『君、大丈夫かい？』

……そうだ。どこかの倉庫で意識を取り戻すと、僕が縛られたロープを解こうとしている男の人がいたんだ。

よく分からないけど、近くに誘拐犯らしき人が倒れていたから、その人が僕を助けようとしてくれてたんだと思う。それで……。

『千春から離れろぉぉぉぉぉ！！！』

「ッ！！」

赤い世界の中心に立つ、世界最強（おねえちゃん）。

そして、足下にはあの人が倒れていて……。

「……理音さん、僕と一緒にいた男の人は、どうなったんですか？」

理音さんにその問いを投げかけた。

……その答えがどんなものであるか、分かっていながら敢えて。

案の定、問いかけられた理音さんは答えづらそうな顔をしている。

どう考えても、子供に聞かせる話じゃないもの。

少し迷ったようだったけど、理音さんは黙ったまま首を横に振った。

「そう、ですか」

……どうして、お姉ちゃん。「やめて」って言ったのに。

どうして……いつも、何も聞いてくれないの？

ぎゅっと、シーツの端を握りしめる。

「……それと、こんな事は子供のあなたに聞かせるべきでは無いのかもしれないけど……」

「なんですか？」

「今回の事件について、今後一切口外する事が禁止されるわ」

……どういう、事ですか。

「簡単に言えば、揉み消しよ。誘拐なんて無かった。殺人なんて無かった。織斑千冬が決勝戦を放棄したのは個人の事情だ。……そんなわけ」

つまり、全部「無かった」事になる。

僕たちが誘拐された事も、お姉ちゃんが無関係の人を殺した事も、全部。

だから、あの人が殺された事も全部、無意味だった事になってしまう。

「後始末をしてるドイツ軍がそーゆー姿勢なのよ。私達がどうこう言っても無駄って事ね」

「そんな！　……お姉ちゃんは？　お姉ちゃんがそんな事許すはずが！」

「黙認するってさ」

理音さんの言葉に、僕は凍り付いた。

「私が効いてみたけど、『仕方ない』って」

「……嘘」

「ま、今その事が公表されたら、あなた達とは一緒にいられなくなるからね。誘拐事件があって、家族を放っておけるほど冷血漢じゃないって事でしょ」

……嘘だと、思いたかった。

どこまでも真っ直ぐで、どこまでも厳しく、どこまでも強い。

そんなお姉ちゃんが、僕の誇りだった。お姉ちゃんが、僕の目標だった。

「嘘だッ！！」

そう叫んでも、現実は変わらない。

僕の中にあった世界が、音を立てて崩れていく。
違う、あの時もう壊れていたんだ。お姉ちゃんが刃を振るったその時から、僕の世界はもう……。

「千春……」

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……嘘だッ！！」

〔Side Out〕

〔Side Rinon〕

混乱する千春に半ば追い出される形で、私は病室を後にする。
あの様子だと、落ち着くまでしばらくかかるかな？

「……ふふ」

思わず、口の端が歪んでしまう。
こうまで私が書いた筋書通りに進んだのだから、笑わずにはいられない。

「ほんと、バカばっかり」

単純で、すぐ騙される。
千春はそこも含めて愛おしいけど、他は憎らしいほどに愚かしい。
嘘は吐いていない。千冬は千春を守るために行動したわけだし、あの男だって千春を助けようとして、不幸な事故で殺されただけ。
……だけど千冬は、最後のチャンスすらも自分で手放した。

（本当に、バカな女）

千春の中にあった最後の砦を、事も在ろうに自分で壊したのだから。
本当なら、もう少し時間をかけて懐柔していくつもりだったけど、誘拐事件が起きたのはある意味幸運だった。
おかげで数年規模のプランを大幅に前倒しする事が出来た。
下手に行動すれば、異常なほど人間離れした千冬に感づかれる。
けど、今回の誘拐は完全に私とは無関係。おまけに結果は私にとって最高の形に終わってくれた。
本来、1年後に千冬を最強の座から引き摺り下ろすつもりだった。
今までにも機会が無かったわけじゃないけど、下手に彼女を倒せば、その裏に繋がっているかもしれない篠ノ之博士に興味を持たれてしまうかもしれない。
彼女がどんな情報網を構築しているかは分からないけど、私の事を感づかれる可能性はある。……少なくとも今、彼女から注意を向けられるわけにはいかない。
要はタイミング。どんな状態、どんな場面で千冬を倒せば、私にとってベストなのか。

（もうすぐ、もうすぐ手に入る）

初めてあの子に会ったのは、3年前。

たまたま千冬の家に行った時、あの子が出迎えてくれた。
その時、私は心奪われた。何歳も年下のあの子供に。とてもとてもきれいなあの子に。
その後も度々、織斑家を訪れる機会があり、千春とも言葉を交わすようになった。その都度、家族と上手く行っていない事を相談されたりもした。
……その度に、私はあの子が欲しいと思った。
うちの母親がよくギャルゲーの話をしていたけど、そっちには何の興味も無い私にとってどうでもよかった。でも、千春を少しずつ懐柔していく時、お姉ちゃんの言っていた事が身に染みて行った。
『段階を踏む事が大事なんですよ。数段飛びで攻略しようとしても、絶対うまくいかないんですよね～』
お義兄ちゃんに飽きられつつも、そう言っていた馬鹿姉。
3年かけて、あの子の信頼を得る事が出来た。
「あと少し」
あと少しで、あの子は私のものになる。

そうすれば本当のプランを実行に移す事が出来るようになる。
積もり積もった憎悪が、一気に噴き出る様というのはいつ見ても爽快なもの。愛する家族から完全に拒絶され、憎悪を向けられたら、あの澄ました顔はどう歪むのかな？

〔Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ〕

〔Ｓｉｄｅ　Ｃｈｉｈａｒｕ〕

翌日、お姉ちゃんが病室にやってきた。

……どうしてだろう。すごく大好きだったのに、今のお姉ちゃん

からは嫌な感じしかしない。
僕を心配しているであろうその表情も、すごく……嫌な感じがする。
おざなりに返事をしつつ、1番気になっていた事を聞いてみる事にした。

「……ねえ、お姉ちゃん」

「なんだ？」

「ドイツ軍があの事件の事、もみ消すって本当？」

お姉ちゃんの目が一瞬だけ止まる。
子供の僕に正直に答えていいのか、それを考えたんだろう。
少し迷ったみたいだけど、お姉ちゃんが口を開く。

「ああ。その方が向こうにとって都合がいいらしい」

「……お姉ちゃんがあの人を斬り殺した事も？」

その瞬間、病室の中が凍り付いた。

まさかとは思うけど、僕が知ってるとは思ってなかったとか？　もしくは、そんな事聞いてくるとは思ってなかったとか？

そんなお姉ちゃんの考えに、少しだけ腹が立った。

「僕、やめてって言ったよね？　でもお姉ちゃんは聞いてくれなかった」

「千春、それは」

「勝手に勘違いして、人を殺した事も全部『無かった』事になるんでしょ？　違う？」

そう強い口調で問い詰めると、暗い表情で短く「そうだ」と応えた。

それが軍の決定なら、お姉ちゃんや僕が何かを言ったって、それは簡単には覆らない。でも、1番許せないのはそこじゃない。

「お姉ちゃんはそれを認めたんでしょ？　その人を殺した事も『仕方ない』って」

「！　何故、それを……」

そう呟いたお姉ちゃんだったけど、すぐに誰が僕にそれを教えたのか思い当たったらしく、表情に怒りが浮かび始める。

でも、それは見当違いの怒り。だって隠してたって、いずれは僕の耳にも入るだろうし、それが遅いか早いかだけの話。

「どうして、あの人を斬ったの？」

そう質問しても、お姉ちゃんは答えない。

ああ、ダメだ。どんどんイライラが積もっていく。もう止まらない。

「あの人は僕を助けてくれたんだよ？　なのに、どうして斬ったの」

「……あの男が、お前を誘拐したと思ったからだ」

「……そう」

ぎゅっとシーツを握りしめ、真っ直ぐにお姉ちゃんを射抜く。

お姉ちゃんは僕と視線が合い、怯えたように1歩後ずさる。

……本気で怒るのって、初めてかもしれない。これまでは怒りたくても怒れなかったから。

「……お姉ちゃんはいつもそうだ。僕の事なんて見てないし、僕の言った事なんて聞いてくれない」

いつも、一夏の事ばかり優先してる。

「違う！　私は」

「ならどうして、やめてって言ったのに聞いてくれなかったのッ！！」

反論出来ず、黙り込む姿を見て、心の中にあった最後の何かが砕けた。

もうこの人は、私のお姉ちゃんじゃない。お姉ちゃんなんかじゃない。

「……出てって」

喉の奥から搾り出したその言葉に、目の前にいる人が顔を上げた。

イライラする。この人がここにいるだけで不愉快だ。

「ち、ちは」

「出てって！　もう僕の前に現れないで！！　出てってよ！！」

第2話：あの人達は今（前書き）

まぁ、過去編は後2話ほど続く予定です。
千春が何を考え、何を決意するのか。
今回は、お馴染みのあの人達も登場します。あくまでサブですけども。

第2話：あの人達は今

完全に千春に拒絶され、私は力なく病室を後にした。

……確かにそうだ。私はずっと、千春の事を気にかけた事は無かった。

愛していなかった、というわけじゃない。ただ、千春は一夏と比べて、人並みに何でも出来る器用な子だった。

だから、何かと手のかかる一夏を優先してしまった。

「私は、バカだ」

千春なら大丈夫だ。

そう思い込み、あの子の事を気にもかけず、ただ自分のやりたいようにやってきた。

それが弟達を守るための道なんだと、そう信じて。

……それが、この結果だ。

「あらあら、本当に無様なこと」

聞こえたその声に、反射的に顔を向ける。
そこには、いつもと変わらぬ笑みを浮かべた風峰の姿があった。
「今まで勝手にしてきたツケが回ってきたって事ね」
「貴様……！」
思わず、風峰に掴み掛かる。
揉み消しについて『仕方ない』と言ったのは、こいつの前でだけだ。
なら、千春にその事を喋ったのは……！
「ええ、私が話したわ。事件の事もぜ～んぶ」
「何故そんな余計な事をした！！」
「あなたが話したら、絶対に都合の悪い事は話さないでしょ？　あの子は当事者だし、全部を知る権利はあるもの」
「屁理屈を……！」
だが、千春はまだ子供だ。もう少し話し方というものがあるだろうに……！

「その子供の前で人を斬り殺したあなたに言われたくないけど？」

掴み掛かっていた腕に風峰の手が添えられたかと思うと、一瞬で私の視界が反転し、地面に正面から強く叩き付けられた。

「あら？　簡単にあしらわれたのがそんなに不思議？」

「貴様、実力を隠していたのか……！」

これまで、風峰の実力を目にする機会はあった。

ハッキリ言ってパッとせず、せいぜい中の上程度。今回も整備の人間として同行したに過ぎない。

しかし、実力を隠していただと？　何のために？

「他人に手札を晒すほど、私はバカじゃないもの」

私の腰の辺りにすっと指が添えられる。

立ち上がろうとするが、いくら力を入れても立ち上がれない。

「知ってた？　私、あなたみたいなタイプが大嫌いなの」

笑顔を崩さないまま、そう言ってのける風峰。
そのまま私の耳元へと口を近づけ、そっと囁く。
「……だから、あの子は私がもらうわ」
「ッ！！」
まさか、そのために……そのために！
「逆恨みしないでよ？　あの子があなた達と疎外感を感じてたのは前々からだし、私はその都度アドバイスしてただけ」
「千春に在る事無い事吹き込んでか……？」
「だから、逆恨みはやめてくれる？　別に嘘を吐いたりは（ほとんど）してないわよ？」
そんな事を言い放ち、風峰はそのまま私からの手を離し、病室の扉へ手をかける。
「あなたは最後のチャンスすらも自分で捨てたんだもの」

「すいません、あの人がご迷惑を」

「いいのよ」

どうやら、千春はほとんど聞いていたらしく、病室に入った瞬間頭を下げられた。

まぁ、部屋の前であんな事話してたら、普通聞こえるわよね。

さてと、うまく本題を切り出す事にしよう。

「ねえ、千春は……日本に戻ったらどうする？」

「どうすると言うと？」

「正直言って、千冬達と一緒に暮らせる？」

そう尋ねると、千春の表情が曇った。

これはちょっと意地悪な質問だったかな？　だって答えは分かり切ってる。

「……無理です。あの人の事、もう受け入れられないと思います」

「やっぱり、か」

問題なのは切り出し方。どういう風に話を切り出すか……。

下手に話を出すと、積み重ねてきたものが全部崩れてしまう。ここは慎重に……。

「あの、理音さん。良かったら、どこか1人暮らしできる場所を紹介してくれませんか？」

「へ？」

「お世話になれそうな人もいませんし、子供が1人ではどこも部屋を貸してくれないでしょうし……」

いや、いやいやいやいやいや、それくらいだったら私のところへ来なさいよ。

自慢じゃないけど、私はマンション（かなりいい所）に1人暮らしだし、子供が1人住まうくらいのスペースはある。

と言うより、元々誘うつもりだったからその方がありがたいし。

「理音さんの家に、ですか？」

そう伝えると、千春は少し悩んでいるようだった。

まぁ、1人暮らしの女の部屋に押しかけるのは、さすがに子供とはいえ男の子なんだから抵抗はあるか。

「部屋は余ってるし、どう？」

「……じゃあ、お願いします」

その言葉を聞いた瞬間、心の中でガッツポーズを決めた。

よし！　これで王手はかけた！　後はじっくり楽しむだけ……ふ

ふふ。

「あの、理音さん？」

「あ、ご、ごめんなさいね」

私はまぁ、現役を引退してからは基本的に引きこもって仕事する事が多いんです。

元々あまり他人と話すのは好きじゃありませんし、必要最低限の相

手と話してるだけで十分なんです。

そんな私の所へ、夫がある話を持って来て、思わず吹っ飛んだ。

「理音が男の子を自分の部屋に連れ込んだ！？」

差し入れのケーキを切り分けてる最中、その話が出たので、思わずナイフを落としそうになってしまう。

その部分だけ聞いたらハッキリ言って笑えない。完全に犯罪です。まだ中学生の子らしいですし。

「それ、マジですか？」

「残念ながらマジだ」

紅茶を飲みつつ、夫（りくと）がそう答える。

あの子……男に興味が無いみたいでしたが、まさかショタコンだったとは。

「育て方、間違えたかもしれませんね」

近いうちに１度、母親としてＯＨＡＮＡＳＨＩしに行かなくてはな

らないかもしれません。

「それなんだがな……」

ふと、陸斗がどことなく困った様な顔をしているのに気づいた。

何かあったんですか？

「理音の所にいる子供なんだが、織斑千春というらしい」

「……織斑？」

珍しい名字ですし、まさかとは思いますが、織斑千冬の血縁者ですか？

「残念ながらな。弟らしい」

「何考えてるんですか、あの子は！！」

思わずダンッ、とテーブルを叩く。

寄りによって織斑千冬の弟を連れ込んだ？　アホですか？　アホなんですね！？

「やっぱりあの子、まだ諦めて無かったんですね……」

薄々感づいてはいましたが、あの子の心の闇はまだ消えていない。

だからこそ、織斑千冬の弟を引き込んだ？　自分の道具にするために。復讐のための道具にするために。

「いや、どうやら本気で惚れてるようだった。少なくとも使い潰すという感は無かったな」

切り分けたケーキを口に運びつつ、陸斗がそう呟く。

ふむ……陸斗の観察眼は本物ですし、そう思うならそうなのかもしれませんね。

「だが、憎しみは消えてないだろう」

「……やっぱり、ですか」

あの子の中にある憎しみは、そう簡単には消えない。

インフィニット・ストラトス……ＩＳの誕生によって、世界は大きく歪んだ。女尊男卑の世界へと。

そんな世界の変革のうねりに巻き込まれ、人生その物を歪まされた人間も決して少なくはない。……理音もその1人。

「ところでその理音という子、どんな子でした？」
「ん？　そうだな……ちょっと喋っただけだったが、いい感じの子だったぞ」

じゃあ、純粋に理音の好意に甘えて、という事でしょうね。

……気の毒に。

陸斗も全く同じ事を思ったのか、渋い顔をしており、私と顔を見合わせて深くため息を吐いた。

「その子、そう遠くない内に食われますね」

「……ああ」

理音はこれまで、異性に対して愛情を示す事は無かった。

恐らく、あの子の中にはこれまでたまり溜まった愛が、放出されるのを今か今かと待ち望んでいる。

それがどういった形で放出されるかは分からない。けど、私がそうだったように、決して真っ当な形で放出されるとは……限らない。

（お願いですから理音、絶対に犯罪だけはしないでください！！）

無駄かもしれない事を、遠く離れた空の下にいるであろう娘に対して祈った。

「り、理音さんダメです！　そんなとこ触っちゃ……」

「あら、ここがいいのかしら？」

「ひゃっ！？……そ、そこは……」

「ふふふ……可愛いんだから」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9033x/

BAD ENDから始まるストーリー

2011年10月28日13時14分発行